

<書 評>

Colin F. Mackenzie, M.B., Ch B., et al. 執筆

Chest Physiotherapy in the Intensive Care Unit

小池純子・大川嗣雄（横浜市大病院リハ科）

ICU の考えが導入されて以来、救急医療や術後管理の面で急速な発達があったことは、周知の通りである。そのなかでも、呼吸管理の重要性は言うまでもなく、また、リハビリテーションのスタッフが急性期の患者に接する必要性のある分野でもある。著者らは、Maryland Institute for Emergency Medical Service System (MIEMSS) のスタッフで、その豊富な臨床経験をもとに、解剖学的、生理学的な裏付けを行いながら ICU での胸部理学療法についてまとめている。

第1章は胸部理学療法の歴史と文献的検索にはじまり、MIEMSS に

おける呼吸管理の現状をまとめ、第2章では急性肺疾患に対する胸部理学療法法の適応について、第3章から第5章までは胸部理学療法の実地で、体位ドレナージ、体位交換、呼吸訓練、パーカッション、バイブレーション、気道浄化（咳嗽と吸引）についてまとめてあり、機能解剖から検査所見、臨床上の諸問題まで、ていねいに解説されている。第6章では合併症としての長期臥床の影響をとりあげ、第7章では胸部理学療法の効果とその分析を行っている。さらに第8章では特殊な疾患の胸部理学療法として、小児、頭部外傷、四肢麻痺、慢性肺疾患、喘息をとり

あげている。第9章では胸部理学療法補助的手段としての IPPB や薬物の利用について述べ、第10章では胸部理学療法法の禁忌と注意点を各器官別に述べている。

平易な英語とわかりやすい構成は入門書としても、また豊富な写真、図表は実技書としても適している。わが国でも ICU における胸部理学療法必要性は叫ばれているものの、実際に行っているところは少ない。今後、この方面の理学療法発展のために本書は役立ってくれるはずである。リハビリテーション医及びスタッフのみならず、ICU や重症患者を扱う病棟の医師や看護婦にも一読をすすめたい。

(25.3×16.4 cm, 頁260, ¥9,180, 1981, Williams & Wilkins, Baltimore/London, 日本総代理店 医学書院洋書部)